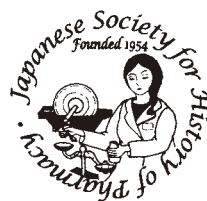


薬史レター



第 57 号

日本薬史学会

J S H P

2010年10月

〒113-0032 東京都文京区弥生2-4-16 (財)学会誌刊行センター内 日本薬史学会事務局
TEL (03)3817-5821 FAX (03)3817-5830 URL <http://yakushi.umin.jp/>

日本薬史学会2010年会(東京)のご案内 — 東京年会へのご参加をお待ちしております —

年会長 海保房夫
(東京理科大学薬学部)

日本薬史学会2010年会をきたる11月13日に首都新宿の神楽坂にあります東京理科大学において開催いたします。本年会は特別講演および口頭、ポスター発表による一般講演の構成で行われます。

一般講演は、口頭発表14題、ポスター発表5題となっております。演題は多岐にわたっており、内容は、「人」、「教育」、「物」、「制度」等々、薬史を彩る興味深いものとなっております。演題をお申込み戴いた会員各位には敬意を表するとともに感謝申し上げます。

特別講演は、東京理科大学に縁があるお二人の先生にお願いいたしました。第1席の和田浩志博士(東京理科大学薬学部講師)からは、先生自身がオランダのライデン大学に留学中に行われたたシーボルト収集の種子・果実標本の検証・同定に関わる研究成果のご発表を戴き、さらに第2席では、遠藤次郎博士(東京理科大学薬学部元教授)と鈴木達彦博士との連名で、漢方処方における丸散方から湯液方への変移の歴史についてご講演戴きます。いずれも会員各位にとりまして大変興味深いご講演となるものと思っております。

恒例により学会終了後に懇親会を開催致します。学会会場に隣接する大会議室を会場として、本学の学生食堂を運営するスタッフにお願いしてお料理、飲み物を整えて戴くことと致しました。会員の皆様には親しくご歓談戴き、秋の味覚を堪能して戴けるよう準備致しておりますので、懇親会にもご出席戴けますようお願い申し上げます。

また、会場は、江戸情緒にあふれた神楽坂にあり、ちょっと足を伸ばして戴きますと皇居、靖国神社を散策戴けます。学会の前後にぜひ東京の街をお楽しみ下さい。

皆様方の多数のご参加をお待ちしております。

日本薬史学会2010年会（東京）のご案内

- 会 期：平成21年11月13日(土) 10:00～18:00
年 会 長：海保房夫（東京理科大学薬学部 准教授）
会 場：東京理科大学神楽坂校舎1号館17階 講堂（新宿区神楽坂1-3）
主 催：日本薬史学会
協 賛：日本医史学会・東京理科大学薬学部
特別講演（S-1）：「薬学の目でシーボルト関連の種子・果実標本を検証する」
和田 浩志（東京理大・薬）
特別講演（S-2）：「丸散方から湯液方へ」
遠藤 次郎（日本薬史学会）
鈴木 達彦（北里大・東洋医学総研）
一般講演：口頭発表（O-1～O-14 1演題15分：発表・質疑応答を含む）
ポスター発表（P-01～P-05）
年会参加費：会 員：（予約）3,000円 （当日）4,000円
非会員：5,000円
学 生：1,000円
懇 親 会：18:00から20:00まで
会 場：東京理科大学神楽坂校舎1号館17階 大会議室
会 費：5,000円、学生2,000円
※参加費並びに懇親会費は、当日会場受付にて徴収させていただきます。

日本薬史学会2010年会（東京）プログラム

受付開始（9:30～）

開会の挨拶（10:00～10:05） 日本薬史学会2010年会（東京）年会長 海保房夫

一般講演発表

口頭発表1（10:05～11:05）

- O-01 自校教育「創立者星一と建学の精神」
○ 三澤美和（星薬科大学・薬理）
O-02 日韓併合中の朝鮮の医育機関での薬学系教育者群像
○ 石田純郎（中国労働衛生協会）
O-03 日向薬事始め（その10）日向出身の、頼山陽および山脇東洋門下生とその周辺
○ 山本郁男¹⁾、宇佐見則行^{1,2)}、程 炳鈞¹⁾、岸 信行³⁾
(¹⁾九州保福大・薬、²⁾現・奥羽大・薬、³⁾宮崎、日向、富高薬局)
O-04 歴史のなかのアポセカリ(三)「ドクター」アポセカリ —ジョウセフ・アダムズ—
○ 柳澤波香（青山学院大・津田塾大）

特別講演 (11:10 ~ 12:10)

- S-1 「薬学の目でシーボルト関連の種子・果実標本を検証する」
和田浩志 (東京理大・薬)

理事・評議員合同会議 (12:10 ~ 13:10)

一般講演発表

ポスター (13:00 ~ 13:45)

- P-01 東京薬舗学校創始者・藤田正方(続)
○ 川瀬 清¹⁾、宮本法子²⁾、小倉 豊²⁾ (1)日本薬史学会、2)東京薬大・薬)
- P-02 香料業界の歴史の変遷(1) —関西方面を中心として—
○ 多胡彰郎¹⁾、宮崎啓一²⁾ (1)長岡実業(株)、2)三栄化工(株)
- P-03 香料業界の歴史の変遷(2) —大阪道修町をめぐる薬種および香料について—
○ 宮崎啓一¹⁾、多胡彰郎²⁾ (1)三栄化工(株)、2)長岡実業(株)
- P-04 小樽市小学校薬品準方 発見と内容
○ 石森靖啓¹⁾、栗林雅広¹⁾、林 昌平²⁾、岡崎政智²⁾、吉沢逸雄³⁾
(1)小樽エキサイ会病院、2)小樽市学校薬剤師会、3)日本薬史学会)
- P-05 漢方処方薬の薬用量と服用法に関する検討
○ 石 瑛¹⁾、鈴木達彦²⁾ (1)東京理大・薬、2)北里大・東洋医学総研)

口頭発表2~4 (13:45 ~ 16:45)

- O-05 日本の薬系大学でのドライラボの歴史と現状 —衛生裁判化学から社会薬学まで—
○ 寺岡章雄、津谷喜一郎 (東京大学大学院薬学系研究科医薬政策学)
- O-06 わが国のアミノ酸系医薬品開発50年の変遷(その3) —ペプチド系医薬品—
○ 荒井裕美子¹⁾、松本和男²⁾ (1)日本医薬情報センター、2)京都大・化学研)
- O-07 明治初期の売薬許認可の事例 県立宮城病院『検薬要務録』の事例から
○ 荻原通弘、遠藤次郎 (日本薬史学会)
- O-08 日本最大そして最後のシメチジン製造法特許係争裁判とその史的意義
○ 西谷 潔¹⁾、寺山博行²⁾、山川浩司³⁾
(1)東京理大・薬、2)有コレクト・メディカ、3)日本薬史学会)
- O-09 キナの国内栽培に関する史的研究：明治初期に行われたジャワ・インドからの熱帯有用植物の導入
○ 南雲清二、佐々木陽平、滝戸道夫 (星薬科大学)
- O-10 松江藩の御種人参(雲州人参)栽培と三瓶山、石見銀山との関連について
—「三瓶人参耕作記願書及金本摩斎記政満傳(安永8年正月)」から—
○ 成田研一 (島根県済生会高砂病院 薬剤部)
- O-11 吉益東洞“万病一毒説”から吉益南涯“気血水理論”への展開
○ 溝口加奈子¹⁾、鈴木達彦²⁾ (1)東京理大・薬、2)北里大・東洋医学総研)
- O-12 中国と日本における四物湯の応用と展開
○ 森田まゆ¹⁾、鈴木達彦²⁾ (1)東京理大・薬、2)北里大・東洋医学総研)

O-13 副作用報告制度の変遷 —欧米の制度との比較—

○ 高橋春男 (日本医薬情報センター)

O-14 台湾薬学会誌に掲載された「漫画」

○ 五位野政彦 (東京海道病院 薬剤科)

特別講演 (16:45 ~ 17:45)

S-2 「丸散方から湯液方へ」

○ 遠藤次郎、鈴木達彦 (日本薬史学会、北里大・東洋医学総研)

次年度年会長挨拶 (17:45 ~ 17:50)

閉会の挨拶 (17:50 ~ 18:00) 日本薬史学会2010年会 (東京)年会長 海保房夫

懇親会 (18:00から20:00)

年会事務局

連絡先: 東京理科大学薬学部 担当 砂金信義

住所: 278-8510 千葉県野田市山崎2641

電話 (FAX): 04-7121-3651

E-mail: sunagane@rs.noda.tus.ac.jp

会場への交通

JR総武線、地下鉄有楽町線、東西線、南北線: 飯田橋駅下車 (徒歩3分)

大江戸線: 飯田橋駅下車 (徒歩10分)

駅出口: JR飯田橋駅 西口

地下鉄飯田橋駅 B3出口 / B2a出口

東京駅から (JR中央線)

御茶ノ水駅乗換え (JR総武線)

飯田橋駅まで【約10分】

上野駅から (JR山手線)

秋葉原駅乗換え (JR総武線)

飯田橋駅まで【約12分】

新宿駅から (JR中央線)

四ッ谷駅乗換え (JR総武線)

飯田橋駅まで【約12分】

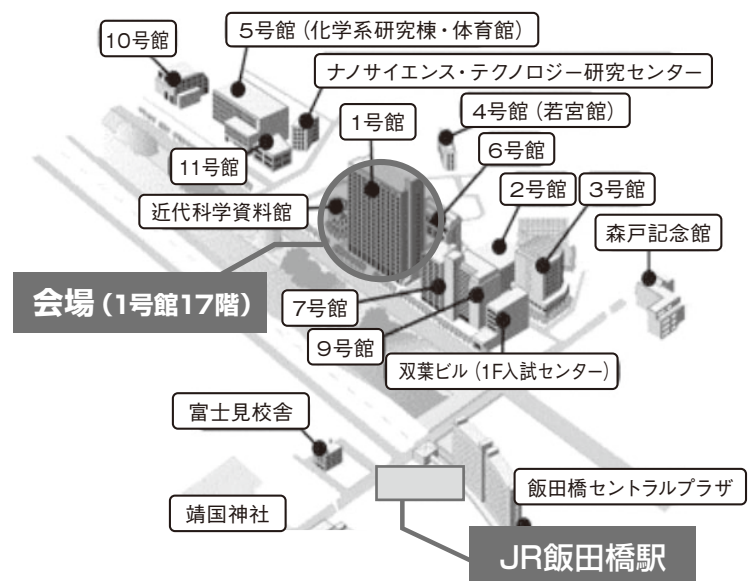
大宮駅から (JR埼京線)

池袋駅乗換え (地下鉄有楽町線)

飯田橋駅まで【約35分】

目黒駅から (地下鉄南北線)

飯田橋駅まで【約19分】



日本薬史学会東海支部第1回例会

下記のごとく日本薬史学会東海支部第1回例会を開催します。
多数の皆様の御出席をお待ちします。

日本薬史学会東海支部長 奥田 潤

開催場所：内藤記念くすり博物館（館長・永縄厚雄）
〒501-6195 岐阜県各務原市川島竹早町1
Tel：0586-89-2101 Fax：0586-89-2197

開催日：平成22年12月5日(日)
10：00～12：00 館内見学、所蔵図書閲覧*
12：00～13：00 薬膳弁当（1500円）**
13：00～13：25 総会
13：30～16：30 例会（研究発表）***

研究発表：13：30～14：30 二谷智子（日本学術振興会特別研究員）
「地方資産家の生活と医薬 ―明治期の盛田久左衛門家を事例として―」
14：30～15：30 永縄厚雄（内藤記念くすり博物館・館長）
「明治の暮らしとくすり」
15：30～16：30 奥田 潤（名城大学名誉教授）
夏目葉子（三重大学大学院人文科学研究科修士）
「古代インドの薬学史」

申込方法：申込者の氏名・連絡先（Fax 又は Eメール）および薬膳弁当**の数を
Fax 又は Eメールにて**11月15日まで**にお知らせ下さい。

連絡先：〒468-8503 名古屋市天白区八事山150
名城大学薬学部教育開発部門
日本薬史学会東海支部事務局長 飯田耕太郎
Tel：052-839-2710 Fax：052-834-8090 Eメール：iida@meijo-u.ac.jp

- * 当日、会員は図書館に入館できます。インターネット等で調査し希望閲覧図書を図書事務室まで原則届出てください。
- ** 薬膳弁当：家族・友人同伴も可能、メール等で予約数を11月15日までにお知らせ下さい。ただし定数に満たない場合、普通弁当に変更となりますのでご了解下さい。
- *** 例会：非会員の方の例会参加も可能です。

バス時間表（名鉄一宮駅 ― バス30分 ―> 川島口 ― 徒歩20分 ―> 博物館）
(行き)名鉄一宮駅・発 8：20、8：50
(帰り)川島口・発 15：28、15：58、16：28、16：58、17：29

学会会員へ e-メールによるご連絡のお願い

会員の皆様へ東海支部からのご連絡は、出来る限り e-メールを使用したいと考えています。
e-メールを使用したご連絡についてご了解いただける会員の皆様は、
名城大学飯田 (iida@meijo-u.ac.jp)あてにご了解のメールをお送りください。
よろしくお願いたします。

第3回 柴田フォーラム 参加記

五位野 政彦

唐の都長安の暑さは「炎熱煮るが如し」だったという。21世紀の日本の都も同じ表現ができそうな8月23日(月)、「第3回柴田フォーラム」が開催された。

会場は東京都品川区の星薬科大学。猛暑にもかかわらず、会場となった新星館2階208教室には60名程の参加者が集まった。

14時。松本和男常任理事による開会の言葉と「柴田フォーラム」の由来について簡単に説明があった。続いて山川浩司会長の挨拶。海外の薬学博物館などには動物薬に関する展示・資料が多くあるが、日本には少ない。材料が集めにくく、生物毒・生物活性の研究も少ない。今日の講演の内容は日本の薬学の中でも画期的なことではないか、という内容。講演後の学内エクスカージョンについても紹介があった。

フォーラムの講演は星薬科大学学長、中嶋暉躬(てるみ)先生による「生物毒の研究史」である。足がお悪いなかの約50分のご講演は、同じ薬学の中にある身であってもなかなか知ることのできない内容のものばかりである。大変興味深いものであった。

ご講演からそのいくつかを拾いだしてみよう。

- ・よくも悪くも「情報伝達を修飾する」ものが毒。(薬と毒は、やはり根本的に一緒だ)
- ・中国の伝説の毒鳥「チン(鳩)」は、ニューギニアにいる「ピトフィ」ではないか。この鳥はヤドクガエルの毒(強心ステロイド)を持っている。ピトフィの胃中に住む甲虫(ジョウカイモドキの一種)は食物連鎖の可能性を思わせる。
- ・カエルの毒には Hunting Magic と呼ばれるものがあり、カエル毒を体内に取り込むことにより、夜間でも目が見えるようになる。
- ・伝承されるものには捨てがたい情報がある。一例として「ホタル」(民間薬)はガマ毒に似た強心薬である。
- ・ヘビには、水溶性のステロイド化合物(-OHを多く持つ)を有するものがあり、他の強心配糖体とは異なっている。
- ・ハチの毒としてはフェアブル昆虫記にカリウドバチの記載がある。日本での代表例はジガバチであり、宿主に寄生して相手をマヒさせる。この寄生は日本でも古くから知られていた。
- ・サソリは中国で食用にもされているが、実は毒性の強い種類である。Na⁺チャンネル阻害作用ではなく、便座型の構造をしたK⁺チャンネル阻害ペプチドである。
- ・クモの代表例はジョロウグモである。100種類以上の毒素(ポリアミントキシン)の混合物であり、後シナプスに作用し、ダラダラと長く効く(あとでお伺いしたが、中嶋先生の代表的な業績のひとつがジョロウグモの神経毒研究だとのことであった)。
- ・毒キノコ。竹本常松先生が「毒キノコにはなめると甘いものがあるんだよ」ということをおっしゃっていたことなどを思い出す。

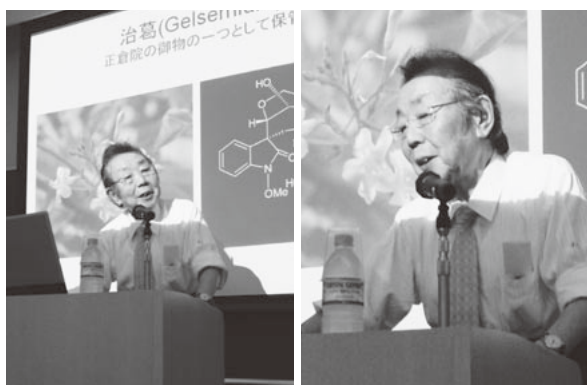
スライド(PW)には複雑な構造やペプチド配列が続いていた。しかしその解説の中にいくつかのユーモアが含まれており、会場からは時折笑いが生まれていた。またフロアからの質問にも答えていただいた。

本講演の座長は、本会常任理事である三澤美和星薬大教授が務めた。

講演終了後、若干の休憩をはさんで学内エクスカージョンが行われた。三澤教授による案内と解説は星薬科大学本館内で行われた。1.星薬科大学本館講堂の由来と講堂内から見上げるステンドグラス、2.スロープ脇の壁画、3.「星一記念室」の順である。時間の都合、また最高気温35.1℃という暑さもあって、薬草園参観は中止となった。

懇親会は新星館1階食堂で行われた。21名の参加者がのどを潤し、また意見を交換した。17時散会。

第3回目となる今回は、前2回よりもオープンな会を目指したため、薬学系の雑誌数誌に開催案内の掲載をお願いした。当日参加者もあり、今後の薬史学会開催イベントにおけるひとつの在り方をみいだすこともできるのではないだろうか。当日の酷暑もあり、柴田先生のご参加をいただけなかったのが残念である。



講演中の中嶋暉躬先生



星一記念室

関西支部だより

第2回 日本薬史学会関西支部研修会報告

日本薬史学会関西支部（宮崎敬一、多胡彰郎）

2010年6月12日(土)、16:00～17:30にくすりの道修町資料館会議室（大阪市中央区道修町）において、第2回日本薬史学会関西支部研修会が行われた。

参加者は非会員2名を含め、計11名であった。

今回、かつて武田薬品工業株式会社研究部門にご勤務された岡 良和博士から「ビタミンB₁の歴史—その発見からアリナミンまで—」をお話しいただいた。

①脚気に関する歴史にはじまり、②脚気の原因探索の歴史、③ビタミンB₁の発見、単離および構造決定の経緯、④アリナミンの発見の道に至る詳細な内容であり、参加者全員がいたく感激した。

中味の濃いお話であったので、会場を移し、会食しながらの質疑応答が続き、計3時間以上におよぶ有意義な研修会となった。

本研修会后、辰野美紀理事および松本和男常任理事から本部の組織変更および本年度の活動などについての報告があった。

因みに、第1回目については本年1月23日(土)に大阪駅前第1ビル・地下1階「キング・オブ・キングス」(大阪市北区梅田)で行われ、宮崎啓一評議員による「関西薬業の変遷—大阪道修町における試薬業界の黎明について—」の話題および辰野美紀理事からの「第39回国際薬史学会(2009年9月16日(水)~18日(金)、オーストリア・ウィーン市)」の出席報告があった。

今後関西支部としては、年2回程度の研修会を行うこととしている。

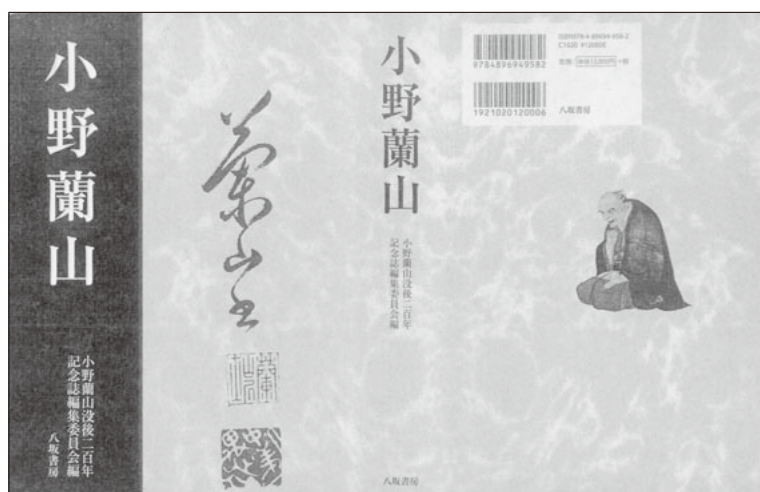
本年末または来年始めの第3回目の研修会については、薬剤師であり、関西大学大学院文学研究科にて博士号を取得された羽生和子氏から「江戸時代の漢方薬の歴史」についてのお話を予定している。

小野蘭山没後 200 年記念行事について

川瀬 清

本年は日本における近代植物学確立の基礎を築いた小野蘭山(1729-1810)の没後二百年に当たるのを記念して、一連の行事・事業が企画された。まず昨2009年春、有志により記念事業会が結成され、記念誌の発行、記念碑の建設、式典の開催などが決まり、日本植物学会、日本植物園協会、日本医史学会などと共に、日本薬史学会も協賛団体として名を連ねた。

記念事業を東西二箇所で開催するように企画された。東京では記念式典を2010年6月20日(日)午前小石川植物園柴田記念館で行なったが、会場には小野蘭山直筆の原稿、植物図譜など貴重な文化遺産が展示された。午後は東京大学農学部の弥生講堂に移って記念シンポジウムが行われたが、参加者は100名を越す盛況であった。終了後、御茶の水ホテルジュラクで懇親会が行われた。参加者には「記念誌編集委員会編：小野蘭山(八坂書房)2010」が配布された。本学会からは、山川会長に代わり川瀬名誉会員が出席し、式典次第の中で、日本医史学会に続き、日本薬史学会を代表して挨拶を述べた。



記念誌編集委員会編：小野蘭山(八坂書房)2010

その際、筆者は話題を柴田承二先生らの正倉院薬物「厚朴」研究に触れた。従来より「厚朴=ホオノキ」との発想では、御物の起源問題は解決不能であったが、全く系統の異なる「クルミ」類の混入もありうるとの研究グループの成果から、御物の起源が、従来全く考えられていなかった種類の植物であるこ

とが報告された。そのことを聞いた筆者は本草綱目啓蒙の厚朴の記述を調べてみると「詳らかならず」とあったので古来からの定説に惑わされていない蘭山の視点を改めて確認したことを述べた。

記念シンポジウムでは、次の諸氏から話題提供がなされた。

遠藤正治(愛知大学)「本草学から植物学へ」では、伝統的・医療の学から、近代的植物学への転換に当たる過程と、小野蘭山の役割が話された。

加藤僖重(独協大学)「シーボルトコレクションに残された小野蘭山の標本」では、シーボルトが日本に滞在中に採集した植物標本のうち、十数種類がロシアを經由して、現在、牧野標本館(首都大学・東京八王子)にあり、そのプロセスも含めて話された。

平野 満(明治大学)「日本本草学史上の小野蘭山の位置」では、蘭山が生育地での採集(採薬)を重視した学風に焦点を当て、その価値を描きだされた。

松田 清(京都大学)「小野蘭山と舶載蘭書」では、江戸時代の本草・博物学に大きな影響を与えた輸入植物図譜、特にワインマンの「花譜」について話された。

邑田 仁(東京大学)「小野蘭山の植物学的視点」では、今回の記念事業の中心を果たされた立場から、鳥瞰的・総括的に話を運ばれ、現代の科学・技術の世界では、新しいアイデアが過剰に評価される傾向にあり、このため質の充実・向上が、必ずしも評価されず、その結果、物事が成熟しないで終わってしまうのは残念なことで、蘭山の才能を羨むと共に、彼が一つの事に集中できた時代にも、羨望を禁じえない等とも話された。

小野蘭山没後200年記念国際セミナー 『日欧博物交流史における C.P. ツェンペリーと小野蘭山』に出席して

高橋 文

6月20日の記念式典を終わって渡されたのが京都会場での案内で、次のように記されていた。

<p>日 時：2010年9月4日(土) 午後1:30～4:30</p> <p>場 所：京都府立植物園 植物会館2階研修室</p> <p>講 師：松田 清教授(京都大学大学院人間・環境学研究科) 「小野蘭山と C.P. ツェンペリー ―植物図譜の文化交流史から」 マリー・クリスティーヌ・スキュンケ Marie Christine Skuncke 教授 (SCAS スウェーデン国立高等研究院・ウプサラ大学) 「C.P. ツェンペリー―アムステルダム、出島からウプサラのリンネ館まで」</p> <p>共 催：小野蘭山没後二百年記念事業会 京都府立植物園</p>

さて、当日は新幹線ひかり号の初発で東京を立ち、京都駅で出迎えて下さった儀我久美子さんと合流、植物園に午前10時に到着、入り口で同窓の青木勝夫さんと会い、講演開始までを広大な植物園を案内して頂いた。

定時に始まった講演会では、松田清先生は日欧交流を主眼として話をされ、ツェンペリーの『旅行記』(初版：ウプサラ1788)はヨーロッパではフランス語訳(パリ1796)が良く読まれるようになったこと、

小野蘭山はドドネウスの『草木誌』(1618)に和漢名を与える鑑定作業を通じて、1. ワインマン『花譜』、2. ミュンチング(1626-1683)『精見植物譜』、3. キニホフ(1704-1763?)『植物印葉図譜』の三書を参照したこと、イギリスではジョーセフ・バンクス所有の小野蘭山・島田充房の『花彙』(1765)は大英博物館に保管されているが、ツェンペリーから入手したのではないかと等々、そしてツェンペリーと小野蘭山は同時代人であり、直接の交流はなかったが十八世紀において植物観察の精神を生かし、観察科学への道を開いた点で共通している。またツェンペリーの『日本植物誌』(1784)はシーボルト、伊藤圭介を通して小野蘭山学統における本草博物学の発展に大きく貢献した、と結ばれた。

次いでスキュンケ教授の紹介があり、フランスやケンブリッジ大学で学び、現在ウプサラ大学文学部教授(比較文学・比較文化)、スウェーデン国立高等研究院においてスウェーデン銀行創立記念財団研究助成により、「C.P. ツェンペリー、ヨーロッパ、日本」プロジェクトを推進しておられ、小野蘭山と同時代人としてツェンペリーのお話をされるとの紹介があった。

スキュンケ教授のお話は、英語で通訳がつき、私にとっては大変に興味深いものであった。教授の母親は1950年代に通訳者として来日したという導入に始まり、ツェンペリーのオランダにおける数人のパトロンについて触れ、植物学者にとってパトロンの有無が大きな要素になること、ツェンペリーは1776年12月に帰国のため長崎港を出帆したが、1776-1777年に3通の手紙を書いてヨーロッパへ送っていること、すなわち日本とバタビアの洋上にてとして1776.12.15付書簡を Peter Jonas Bergius (1730-1790、医師、植物学者、リンネの高弟)へ、1776.12.20付書簡を Abraham Bäck へ (1713-1795、ストックホルム医学会会長、リンネの友人、この書簡については高橋は、「薬史誌29巻1号、ツェンペリーと日本—水銀水療法について」、で紹介している)、そしてバタビアから1777.1.25付書簡を Nicolas Laurens Burmann (1733-1790、アムステルダム大学植物学教授へ、(三通の手紙の内容には触れなかったが、日本滞在やその印象であることを示唆していると思われる)、Abraham Bäck や Lars Montin (1723-1785、植物学者、ハルムスタード地方医官、リンネの高弟)のおかげでツェンペリーは帰国途上(1777)にウプサラ大学植物園講師に任命されたこと、ツェンペリーの植物標本などを保管していた博物館は1999年に改築され、近代的な進化博物館 Museum of Evolution: リンネ館に生まれ変わったこと、ツェンペリーの Flora Japonica (1784)は国際的に読者を得るためにスウェーデンではなくドイツのライプツィヒ Leipzig で発刊されたこと、等を話された。1993年秋に横浜で開催された第十五回国際植物科学会議のツェンペリーシンポジウムでは、この件に関してストックホルムの国立自然史博物館の Bertil Nordenstam 教授は、当時スウェーデンの経済状態が悪かったのでライプツィヒで出版されたと説明したが、いくつかの解釈があることも興味深いものであった。聴衆は百名を越えており、盛況であった。



京都府立植物園 植物会館2階にて
講演中のスキュンケ教授、左は通訳者
— 青木勝夫撮影



懇親会風景 — 青木勝夫撮影

スキュンケ教授歓迎懇親会は、18:30から京大病院正門南の割烹「十両」で催され、大変にアットホームな雰囲気の中で、職種の異なる方々とお話もでき楽しくも意義ある時間を過ごすことができた。

小野蘭山没後200年記念事業会京都会場幹事として、C.P. ツェンベリールを取り上げ国際セミナーを企画、実行、講演者になって下さった松田清教授、そしてスウェーデンからの講師スキュンケ教授に感謝すると共に、京都でお世話になったすべての方々に感謝いたします。

なお、今後の京都会場行事として次の三つが予定されていることを付記する。

1. 記念講演会、11月23日(火、勤労感謝の日) 14:00～15:00、京都府立植物園植物会館2階研修室、講師 杉本秀太郎氏(芸術院会員)
2. 小野蘭山顕彰碑除幕式、11月23日(火) 15:30～16:00、京都府立植物園大芝生地
3. 小野蘭山没後二百年記念大森文庫展、11月23日～28日 10:00～17:00、京都府立植物園展示室。

以上

日本薬史学会ウェブサイト50000アクセス突破

日本薬史学会 広報委員会

2005年に開設しました現在のウェブサイト(ホームページ)が、今年2010年6月25日に5万アクセスを超えました。これもひとえに会員諸氏のご協力のおかげです。ありがとうございます。

日本薬史学会のウェブサイトの歴史は、五位野政彦現常任理事が個人ホームページ上に2000年に非公式ページとして薬史学会の情報提供を開始したことにはじまります。当時利用していたIT企業が合併してしまったことから、よりよいウェブサイトへと移行したのが2003年です。この2003年からのサイトは日本テレコム(現ソフトバンクテレコム)のサーバを利用していました。このころの経緯については薬史学雑誌に雑録として掲載されていますのでご参照ください(38巻:2003年:pp.211-213、40巻:2005年:pp.66-68)。

この日本テレコム時代から、ウェブサイトを通じての問い合わせが多くみられるようになりました。ウェブサイトのことは理事・評議員会等での話題にもなりました。

そこで津谷喜一郎現副会長、山田光男現名誉会員の助言により、2005年4月に現在のサイトに移行しました。現在のサイトはUMIN(大学病院医療情報ネットワーク)の中のサーバ(基幹コンピュータ)を利用しています。UMINは東京大学医学部病院内にある、医学、薬学、看護学ほか大学病院業務(診療・研究・教育・研究)及び医学・生物学研究者の研究教育活動の支援を目的としてサービスを行っている研究センターです。多くの医学・薬学団体・学会がUMINを利用して情報提供活動を行っています。これが公式の日本薬史学会ウェブサイト(<http://yakushi.umin.jp/>)の始まりです。

“yakushi”は津谷副会長のアイデアであり、「薬史」とともに「薬師：如来、くすし、アジア各地でのpharmacist」を意味しています。諸外国からのアクセスには「yakushi (gaku)」としてイメージされることも期待しています。

2005年10月からは三澤現常任理事作成の本会ロゴをトップページに載せています。

アクセス数の推移を見てみましょう。2007年4月初旬に17000アクセスを超えてから、

2009年1月に35000、2009年10月中旬に44000、そして冒頭で述べたとおり2010年6月に50000アクセスを超えました。

Google（日本版）、yahooなどの検索サイトで、「薬史学」、あるいは「薬」「歴史」等のキーワードから検索が可能になっています。

今後もウェブサイトでは、会員内外への各種集会のご案内だけでなく、英文サイトの拡充も含め、幅広い活動を行っていく所存です。会員の皆様のご支援をお願いいたします。

新刊紹介

服部 昭 著 印籠と薬 —江戸時代の薬と包装—（風詠社）

B5版 255頁 定価 1,429円＋税



本書は本会評議員の服部昭氏が薬史学雑誌に11編の論文として発表してきた「薬の携帯とその容器」を基にして記述された興味深いユニークな著書である。

江戸時代には、武士は参勤交代で、民衆はお伊勢まいりなどで旅は盛んであった。そのため常備薬としての薬を上手に包装して、その容器として印籠に収めて用いていた。印籠は水戸黄門のドラマですっかり有名になったが、薬の容器としての印籠と根付けは江戸期が生んだ傑作で、シーボルトは200点を超す印籠と根付けをオランダに持ち帰った。今日、これらの標本はライデン市の民族学博物館で見ることができる。

本書は九章に分けて記述されている。1. 印籠は薬の容器 —薬携帯の習慣と包装、2. 印籠の構造と薬の容器 —包装・容器の技術、3. 薬のある暮らし —薬はどのように使われていたか、4. 医療と薬の製造販売 —医師と薬を作った人たち、5. 紙が売薬を広めた —薬の包装と紙の利用、6. 文字社会の成立 —包装による情報の伝達、7. 「薬の気」を守る —薬の品質と包装、8. 蘭学がもたらした薬のガラス瓶 —近代包装の夜明け、9. 薬包装の原点を築いた人たち —曲直瀬道三と貝原益軒、本書には興味深い写真や図譜が収録されている。

著者はこのような薬の容器に関する研究を発展させて、その後、有志らと協同して「医薬品包装懇談研究会」を発足させ創包工学会の基礎を作り、医薬品の包装技術開発に活躍されている。本書はこれらの歴史を知ることができる興味ある著書である。

（山川浩司）